

『フラメンカ物語』とその人間性

——トウルバドール叙事文芸研究序説(1)——

谷 口 勇

- I. 『フラメンカ物語』解題 (1. 『フラメンカ物語』の由来とその成立時期 2. 『フラメンカ物語』の作者とその背景)
- II. 『フラメンカ物語』の人間性 (1. 『フラメンカ物語』の梗概 2. 『フラメンカ物語』に於ける愛 (Amors) 3. 『フラメンカ物語』の手法と位置)

緒 言

Troubadours による Oc 語の抒情詩 (Lyrique) に対しては、早くから詩人や学者達の深い関心が寄せられ、夥しい研究が行なわれて来ている。そしてこれにはそれだけの理由があったのである。しかし反面、その人間性に於て、これに豪も引をとらない、Troubadours の叙事詩篇に対して無関心を招来する結果になっているとすれば、甚だ遺憾に堪えないことである。

この小論に於ては、十三世紀末頃と想定される匿名の Troubadour による《Flamenca》とOc語による唯一の Arthur 王物語である《Jaufré》、それに宗教文学とも称すべき、散文による特異な物語《Barlaam et Josaphat》の三の物語を取挙げて、各々の作品の持つ特性や問題点を浮彫りし、これに若干照

明を当てて見ようと思う。本稿では先ず《*Flamenca*》物語を取扱ってみたい。

I. 『フラメンカ物語』解題

1. 『フラメンカ物語』の由来とその成立時期

《*Flamenca*》を説明するには先ず僥倖の伴った由来から始めねばならない。¹⁾

その訳は Carcassone 図書館所蔵の、既に一部毀損していたとは云え、8095行も有する龐大な写本が、中世に於ては殆ど読まれもせず、また引用されることもないまま放置されていたから、もしこれが散佚していたなら、完全に忘却の裡に葬り去られていたかも知れなかったからである。²⁾

これに始めて日の目を当らせたのは F. Raynouard である。彼は1838年、若干の分析を加えてこの写本を出版した(*Notices et extraits des manuscrits*)。これに部分訳を附して、1865年、P. Meyer は第一版を江湖に送った(*Le Roman de Flamenca publié d'après le Manuscrit unique de Carcassone traduit et accompagné d'un glossaire*)。³⁾ その後、彼は第二版の発行を企てたが、その内の第一巻(テキストと語彙)のみが刊行された(1901年)。⁴⁾

中世の写本は古代のものと同様、題名の分からないものが多いが、この物語も、題名・作者共、写本の最後の部分と中程の若干の個所が欠如して不明なのだが、Raynouard がこの物語の女主人公 Flamenca に因んで、《*Le Roman de Flamenca*》と名付けたのに則り、一般にこのように呼称されるに至ったものである。⁵⁾

《*Flamenca*》成立の時期に関しては何ら明確なことは分からない。唯僅かに《*Flamenca*》のテキストそのものの中に散見する若干の言及を基にして、多少の推測が試みられているだけである。詳細はここでは触れないが、最近の研究では、1270年乃至1300年の間がこの物語の成立時期と想定されている。⁶⁾

また《*Flamenca*》中に出て来る事件が生起した時期に就いても、数多論争

されているが、この物語の筋に於て多少とも役割を演じている登場人物や、テキストを周到に研究した結果では、十二世紀末期に生じたことであるらしい。⁷⁾尤も《*Flamenca*》を歴史小説と見做せば、曲解も甚しい。しかし Louis 九世時代の人情や風俗の歴史を知る上に、《*Flamenca*》が比類なき宝庫となっているのは事実である。

2. 『フラメンカ物語』の作者とその背景

前述の如く、写本には欠損している個所があって作者は不明である。十二世紀末の慣行からすれば、作者名がこの写本の冒頭、ないしは巻末に記されていたであろう。学者達は、この不幸にも暗闇の中に閉ざされてしまった作者を、何とかして解明しようと暗中模索して来た。そして1722行—1736行の中に幽かな微光を認めたのである。

v. 1722— Ben feir' [ait] al le seners d'Alga

Si tan ben faire o pogues,

E pero, si dreitz corregues,

Atertan li degra valer,

Car volontier fa som poder

E'n passa poder ben soven,

Quar eu sai ben ques el despen

En l'an cen ves en un jorn tan

Com a de renda en tot l'an.

Del sieu ben dir no m'antremet,

Mais, si non fos p'En Bernardet,

De que-m sap mal quar plus non l'ama,

E nonperquan ges non s'en clama,

Ben pogra dir, senes mentir,

v. 1736— Que lausan lui no-m puesc fallir.¹⁾

これは Guillaume de Nevers が吟遊詩人達に振まった恩恵のことを述べて

いるのであるが、ここに出て来る **Bernardet** が作者の名前であると俄かに断定出来ないし、²⁾ またその生涯を歴史的に再構することは不可能である。とは云条、テキストを注意深く読めば、*«Flamenca»* の作者の好尚や傾向が分かるし、少なくともその人柄の片鱗は窺える訳である。

先ず第一にこの作者は教養が広いことに気付く。彼は屢々 **Ovidius** ³⁾ を引用しているし、また **Horatius**,⁴⁾ **Seneca**,⁵⁾ **Boetius**,⁶⁾ 等、ローマの著作家達から靈感を得ている。**W. P. Ker** が、「恐らくこれは文芸に於ける古典の範例の最初の完璧な近代的消化である」⁷⁾ と称えているのは当を得ている。

しかし、更に重要なことは、この作者は **Arnaut Daniel**,⁸⁾ **Marcabru**⁹⁾ 等、プロヴァンスの詩人は云うに及ばず、就中、中世フランス文学に造詣が深かったことだ。主なものを拾い上げて見ても、*«Audigier»*,¹⁰⁾ *«Renart»*,¹¹⁾ *«Flore et Blanchefleur»*,¹²⁾ *«Pyrame et Thysbé»*,¹³⁾ *«Narcissus»*,¹⁴⁾ *«Ivain»*,¹⁵⁾ *«Perceval»*,¹⁶⁾ *«Erec et Enide»*,¹⁷⁾ *«Cligès»*,¹⁸⁾ *«Lancelot»*¹⁹⁾ 等々枚挙にいとまがない程である。

この匿名詩人は殊に、十二世紀フランスの大作 *«Roman de la Rose»* に通曉して居り、これから多大な靈感を得て来たと推察される。

例えば *«Roman de la Rose»* に於ては、擬人化された愛の神が恋人と話を交しにやって来て、種々の指令をするのであるが、*«Flamenca»* にもこれと酷似した行が見られる。

v. 1780— En cor li venc que l'amaría

S'om pogues ab ella parlar.

Mentre qu'estai en cest pensar

Amors ben pres de lui s'acointa

E fes si mout gaia e cointa;

Fort li promet et assegura

Qu'il li dara tal aventura

Que mout sera valent e bona.

Fort lo presica e-l sarmona

E mostra li es ben artos

v. 1790— E sobre totz homes ginós.²⁰⁾

A. Brunel が推論しているように、これを以てしても《*Flamenca*》の作者は《*Roman de la Rose*》を知っていたと断定しても良からう。また次に引用する詩句も大いに注目に価する。

v. 6554— Car a grans penas mais l'entent

Entendementz, que sol coucebre

Moutas res que non sap percebre

Aureilla, ni lenga parlar ;

E per so vueil dir e mostrar

Que cil douzors, ques al cor tocha

Per oilz, val mais que cil de bocha ;

Plus fina (es) e plus entiera ;

v. 6562— E prec qu'entendas la cariera.²¹⁾

作者はここで、愛の悦びは口からよりも眼からの方が大きいことを示そうとしているのである。

いずれにせよ、《*Flamenca*》の著者が教養人であったことは疑う余地がなく、また彼も研究や教養の面で一頭地を抜いている人々を高く評価していたことに疑いはないのである。²²⁾ これには作者が *Alis* に云わせている次の言葉が何よりの証拠となる。

v. 4807— Quar ben conosc que pa ni sal

Negus hom ses letras non val,

E trop ne val meins totz rix nom

Si non sap letras queacom,

E dona es trop melz aibida

v. 4812— S'es de letras un pauc garnida.²³⁾

この作者は今迄述べて来た云わば世俗的な教養の他に、神聖な知識も併せ有している。即ち彼の典礼儀式や慣習に対する造詣の深さには、彼が聖職者でもあったのかと思わせる節が見出されるのである。²⁴⁾

このように《*Flamenca*》の作者は聖・俗と云う二面の教養を併有していたことが結論されるのであるが、ここからして、この作者が属していた社会的階級を周って議論が分かれて来る。

Ch.-V. Langlois は、この作者が聖職者の知識と俗人の気軽さを持っていた、と述べて1799行 (“*Car tu es cavalliers e clercs*”) を引用し、こう云うことは吟遊詩人の資質と必ずしも相容れないものではないとしている。²⁵⁾

Bustini 女史は積極的にこの匿名詩人が聖職者であったと推測し、その論拠として、当時に於ては聖職者だけがこのように広範な、殊に古典の教養を持ち得たのだし、これ以前のフランスや、同時代のフランスの「語りもの」には未知だった、「聖職者」にして同時に騎士の教養を併せ持つ **Guillaume de Nevers** のような人物を主役として物語の中に導入することが出来たのは「聖職者」を措いて他になかったと云う事実を論述している。²⁶⁾ いずれにせよ、この点に於ても推測の域を出ることは出来ぬのである。

《*Flamenca*》の作者の主な関心は、他の多くの中世文学に於けると同様、貴族に向けられている。中産階級や、殊に農民は貴族との関係の中でのみ現われているに過ぎない。²⁷⁾

町人や商人、それに職人——例えば腕利きの **Peire Gui** と、その妻であり、フランス的な魅力に富む **Dame Bellepile** の如き——がかなり重要な役割を演じていることから、**Louis** 七世から **Philippe-Auguste** 時代にかけて、中産階級が北仏同様南仏でも、政治的・社会的進展を遂げていたことを示している。

また実際、1145から1206年の間に、絶対権力を振っていた **Bourbon** の領主達も **Breuil, Souvigny, Franchesse, Mauge, Saint-Bonnet, Bourbon**, 及び **Gannat** に対し特許状を与えていたのである。²⁸⁾

ともあれ、ここに描かれているようなことは屢々起っていたのに相違なく、

町の人々が広場に蝟集して、自治の問題を討議し、領主に特許を要求し、ある場合にはそれが認められることもあったであろう。

『*Flamenca*』の主題たる“奸計により欺かれた焼餅やき”は、中世文学に於ては珍しいことではない。この源泉は『*L'Inclusa*』と題する小咄で、『*Libro dei Sette Savi*』の中に見出されるものである。この書は異本が多く、殆ど全ての西洋語に翻訳されて巷間に流布していたから、『*Flamenca*』の作者もこれを知悉していて、その物語の骨法にこれを使用したようである。しかし作者は『*L'Inclusa*』の話が元来有していた低俗性を払拭して、代りに宮廷風な精神と様式を導入し、これを教養あり洗練された環境の中に転移させたのである。²⁹⁾

この章を結ぶに当り、『*Flamenca*』の言語に就き若干触れて置きたい。

『*Flamenca*』が書かれたのは *langue d'oc* を話す地方の西部であったが、十三世紀頃に同じ *langue d'oc* を話す地方の東部で筆写されたものらしく、各詩句に於て脱落性の ‘n’ (*n*-mobile) が脱落しているのが分かる。またこの他にも、イスパニア語のように *ll* が口蓋音化 (palatalistion) して居り、*ecce-ea* から派生し、女性指示冠詞の意味を持つ *sa* や *ca* (*z* または *tz* と発音される) のような形を使用したり、頭文字の *ca* を堅持し、*ct* 群を口蓋音の *c* に変形させていること等は西部言語の持つ特徴を示すものである。³⁰⁾

II. 『フラメンカ物語』の人間性

1. 『フラメンカ物語』の梗概

『*Flamenca*』の筋は単純である。¹⁾ 作者は先ず Bourbon の Archambaut 殿下が Nemours 伯の娘 Flamenca と如何に結婚したかを語るののである。

結婚式の後に行なわれた豪華な宴会に臨席したフランス王が、馬上槍試合の折、Flamenca のものと思しき女ものの袖をリボン²⁾として槍の先につけて居り、また王が親しそうに城主夫人 (Flamenca) の腕をとるのを見て、フランス

王妃は **Flamenca** が王の思い女ではないかと訝り、このことを **Archambaut** に報告したのである。

最初は **Archambaut** もこのことを信じなかったが、やがて彼の方でも嫌疑を抱くようになり、而もこの為に落ち落ち休息もとれない位、その嫉妬は増大して行くのであった。所で実はこの邪推は誤りで、フランス王は唯、**Flamenca** に栄誉を施そうと欲したのみであって、新婦は貞淑そのものだったのである。

しかしこの日から **Flamenca** の哀れな生活が始まる。彼女は塔の中に幽閉されてしまい、教会以外へは外出しないよう、嚴重な監視下に置かれる。一方、夫の **Archambaut** は髭ぼうぼう延び放題にし、うるさい連中を恐れさせ、近寄らせないよう、兇暴になる。

所が愛の神に鼓吹された若い騎士 **Guillaume de Nevers** が **Flamenca** の受けている非道い仕打を聞いて、**Bourbon** にやって来ることになる。**Guillaume** は夢の中で見た戦術を用いる。(これはこの物語中の白眉とも云うべき、最も洗練された、優雅な独創的着想である。)そして嫉妬深い **Archambaut** の嚴重な監視にも拘らず、**Guillaume** は **Flamenca** に近づき、自分の愛を打開け、彼女の心を征服することに成功する。

即ち **Flamenca** は当時の風習で毎日曜日教会に行くのに、顔を布で被って行き、礼拝堂では聖職志願者の差出す接吻牌に口付するだけだったが、一方勉強を積み、ラテン語や賛美歌を知悉していた **Guillaume** は数週間、聖職志願者になることに成功したのである。

こうして最初の日曜日の弥撒では、開いた福音書抄録を持って **Flamenca** の間近かにやって来て、彼女がその頁に接吻するために屈み込み、二人の頭が殆ど触れようとした時、溜息のように “**Ai las**”³⁾ とだけ低い声で呟いたのである。

次の日曜日迄の一週間、彼は果して **Flamenca** がこの言葉を聞いて呉れたかどうか、理解して呉れたかどうかと思案して過ごしたが、他方味気ない日々を送らねばならないのを嘆く以外に何もすることのなかった彼女の方でも、この

一週間と云うもの、只管あの嘆息は一体何のことだろうかと、二人の忠実な女中に尋ねたりして、たった二語の言葉の意味の分析に費す。そして若者があの言葉を発した時の態度が臆病だったことや、彼があの二語を呟いた時赤らんだことを聞いて、女中達は **Flamenca** が彼に懇懇な答をしてやるようにと元気づけてやるのである。

Flamenca は不名誉と危険を恐れて、この望みありそうな冒険に乗り出すことを躊躇する。しかし二人の女中 (**Margarida** と **Alis**) から、その若い聖職志願者を励ましはしても、余り深く係り合わないように、周到な助言が与えられたりして、**Flamenca** は多少の疑懼を感じはしたが、弥撒の間未知の若者と逢引することが悪いとは思わなくなる。かくして一週間と云うもの聖書の代りに、その時読んでいた《*Blanchefleur*》物語の頁に接吻しながら返答する練習に喜々として励むこととなる。

そして女中達は、**Flamenca** の声の高さが **Guillaume** に聞こえるのに十分かどうか、また嫉妬深い夫に分からない位低いかどうか、声の調子を測ってやるのであった。

こうした練習を終えて、二週目の日曜日に行なわれた二人の密会に於ては、**Flamenca** が儀礼的に慎み深く“*Que plans?*” (何を嘆いているの) と問い返したのである。一週後、**Guillaume** は“*Mor mi*” (僕は死にそうです) と答える。こうして奇妙な対話が二人の間に始まったのである。週に一言では (幸に若干祝祭日が重なったが)、ことがそう早くは進捗しない。しかし彼等の発する語は短くとも、細心の工夫を凝らしたものであり、それだけに教会内で行なわれる彼等の電文的な短音節の会話と、これに費す彼等の長い熟慮は際立った対照をなしている。

八日後に **Flamenca** は“*De que?*” (何のために) と尋ねる。これに対する **Guillaume** の答えは“*D'amor*” である。こうして始められた会話は礼拝式毎に続けられる。

“*Per cui?*” (誰のために), “*Per vos*” (あなたのために); “*Qu'en puesc?*”

(私に何が出来て), “Garir” (癒すことが); “Consi ?” (どうやって), “Per gain” (策略で); “Pren le” (それを考えなさい), “Pres l'ai” (もう考えました); “E qual ?” (どんな), “Iretz” (行って下さい); “Es on ?” (どこへ), “Als banz” (温泉へ)⁴⁾ “Cora ?” (いつ), “Jorn breu e gent” (次の良い日に); “Plas mi” (好いわ)。

遂に決定的な同意の言葉が吐かれた訳である。これと共に心理的な独白の時期は終りを告げ、この Fabliau の真の夫たる Archambaut が戸口で嚴重に監視している間に、二人の恋人、Guillaume と Flamenca は温泉場の地下室で甘い密会を楽しむことになる。

この後に続く物語りは余り興味をひかない。恋人達は幸福を満喫する。夫も人間味を帯びて来る。それから Guillaume が騎馬試合で戦うために出発する所で原文が埋滅してしまっている。

2. 『フラメンカ物語』に於ける愛 (Amors)

《Flamenca》は騎士道的な愛、即ち高度に理想化された愛の世界の物語である。しかし肉体的なものも容認されている点では宮廷風恋愛 (amor cortes) との混淆を見せている。

一番注目されるのは、愛 (Amors) の擬人化が、他のプロヴァンスの叙事詩と同じ慣習と理想に基づいてはいるが、¹⁾ それがより一層強調された形をとって表われて来ていることである。

Amors は絶えず表われて来る。恋人達の心を操縦し、彼等に甘く悪魔のように囁きかける。

v. 4718— Mais per Amor o ai vesat

Que-m fai tener midon soven

Tot a ma guisa en dormen.²⁾

愛する者の心が愛される者の心の中に没入し、分担される、つまり愛の精神感応 (télépathie) が《Flamenca》には顕れているのである。³⁾ 感官が心へ集中し、心と心が夢の中で交感する。このような愛の神秘に繋がる様々の精神状態

が正確に、独創的に分析されている。慣習や、象徴や、比喻に過ぎぬようなものを、《*Flamenca*》の作者は、凡そ真の恋人達が認識すべき、主観的且つ現実的状态であるかの如く語っているのである。

この物語は夢の世界であり、半ば無意識の超現実的世界であるが、さりとて決して非現実の世界ではない。確かにこの作者は「宗教に固有な神秘性を払拭し、神を教会から放逐している」⁴⁾と云えよう。弥撒の時には、教会の中には女神 *Amors* と恋人 *Flamenca* の二人しかいないも同然なのだからである。

またこの匿名詩人は他の *Troubadours* にもまして情熱の本質を理解していた。《*Flamenca*》に描かれているのは不義な愛ではあるが、これは *Flamenca* が犯罪に傾斜していたと云うよりは、*Archambaut* の耐え難い行為から齎らされたものであり、彼が彼女を虐待しなければ、決して彼女は他に愛情を求めることはなかった筈である。⁵⁾ しかし、恋人達の心の交感から一度び生じた情熱が《*Flamenca*》に於ては人間の本性に従って展開して行くのである。

v. 4644— *D'amor ha hom cella douzor*

Que-s dol per la do(lo)r d'autrui.

Anc mais tan piatos non fui.

Ni-m duelc per las autrui dolors.

E tot aiso m'a fag Amors,

Qu'ieu ai de mi donz pietat

Quar estai presa mal son grat,

E non es mals qu'ieu non volgues

v. 4652— *Avanz aver ques il l'agues;*⁶⁾

他人への思遣りというか、完全な愛他主義、博愛主義が巧みに深みを以て語られている。恋の苦しみが当の主人公を高貴にさせる働きがあり、徳と力の源泉であるとする考えは中世と共に廃れ去ることは決してなかった。それは *Dante* や *Petrarca*, 更には *Corneille* の劇の中に顕れて居り、今日でさえ顕著なものである。⁷⁾ 《*Flamenca*》が書かれたのは、プロヴェンスの恋愛詩が衰滅せ

んとしていた時期であって、爾後、愛は愛他主義的な他の一切の愛情とは明白に区別される感情と見做され、感じられるようになった。⁸⁾

《*Flamenca*》が、プロヴァンス文学に於ける最初の偉大な心理小説であると云えば肯綮に当たらない。何故なら《*Jaufré*》と云う大小説があるからである。しかしながら、《*Flamenca*》（や《*Jaufré*》）は《*La Princesse de Clèves*》を通り Marcel Proust に至るフランス文学の長い伝統の濫觴をなす、オック語による物語であることは疑うべくもないのである。⁹⁾

3. 『フラメンカ物語』の手法と位置

《*Flamenca*》に於て最も特徴的な手法と云えば、鶯の歌により恋人の心に強い幻想的效果を生じさせる件りである。

Guillaume は唯一人、主人を伴って郊外に出かけるが、鶯の歌が気にかかって、主人の言葉には耳を借そうとしない。

v. 2332— E van s'en fors en un gardi

On le roncinols s'esbaudi
 Pel dous tems e per la verdura.
 Guillems se get' en la frescura
 Desotz un bel pomier florit.
 L'ostes lo vi escolorit
 E cujet si que-l malautía
 De que-l parlet a l'autre día
 L'augues en aissi descolrat ;
 Fort prega Deu que-l don santat
 E-l lais complir tot zo qu'el vol.
 Guillems entent al rossinol
 E non au ren que l'ostes prega.
 Vers (es) qu'Amors homen encega
 E l'auzir e-l parlar li tol,

E-l fai tener adonc per fol
 Cant aver cuja plus de sen !
 Guillems non au ni ve ni sen,
 Ni-ls oils non mèn, ni ma ni boca ;
 Una douzor al cor lo tocha

v. 2352— Que-l cantz del rossinol l'adus.¹⁾

鶯の歌を聴くのが Guillaume の習慣になっていたことは、

v. 3307— Guillems estet en aital pausa

En la cambra tro a nug clausa,
 Adonc anet, aisi con sol,
 El bruil auzir lo rossinol,
 E ges sos mals non li mellura,

v. 3312— An(s) s'en recrusa e pejura;²⁾

に見えている通りである。

このように鶯を導入する手法は、一種の“*deus ex machina*”と考えられなくもないが、恐らくこの種の文学では最初のものと思われる。

また、《*Flamenca*》を読んで賛嘆させられることは、その細部にわたる描写の精緻さである。それに全篇が新鮮味のある表現に富んでいる。そこには屈託がなく、伸びやかで、軽快な、時代の隔たりを感じさせない一種の爽快さが充溢している。

無論、当時の文学に個有な、退屈させるような冗漫さの欠陥も若干存するが、典雅な主題と云い、豊かな機智と云い、また十二・三世紀上流社会の風俗習慣の一断面を如実に反映している点は全く興味深いものがある。

この物語のお蔭で、われわれは騎士の祝宴や、馬上槍試合を見物出来るし、また Guillaume が司祭と旅籠屋でする食事や、公達の朝食に列席することも出来るのである。また豪華で贅を尽した宗教儀式や、色々な放浪楽師が貴族の大邸宅の社交場で競う娯楽を通じて、男達と婦人との間に行なわれる儀礼的關係

が、如何なるものであったかも明白に知ることが出来るのである。³⁾

当時の軽佻な者、教養ある者、繊細で上品な者、総てが物語の筋の単なる背景のみに留らず、各々その理想と感情を有する独立の人格として、われわれの眼前に登場して来る。

このような作者の才気は、Nelli をして云わしむれば、「十七世紀のそれではなくして、事物を高貴さと新鮮さで、而も過度に信ずる風をせずに語る巧妙な素朴さ (une naïveté savante) であり、全く深い倫理観乃至は心理的省察の証左⁴⁾」なのである。そしてこれあるが故に **Flamenca** と **Guillaume** と云う中心人物が、われわれの記憶を繋いでおくに十分な背景を持たないとしても、この欠点を補って余りあるものになっているのである。

換言するならば、「主要な関心事以外は総てのものを投げ捨て、かくすることにより、彼の師 **Chrestien** の先を進んで行った⁵⁾」のである。

この匿名詩人が **Guillaume de Nevers** なる人物に僧侶 (clerc) と騎士 (cavalier) の性質を統合させて、愛に関しては僧侶と騎士といずれが優越するかと云った、当時の社会や文学に於ける論争⁶⁾ を見事に解決したことは、この作品の心理的価値を損うものではない。⁷⁾

登場人物は空虚な抽象ではなくて、情熱も弱点も徳も併せ有する生身の人間である。この作者が言葉の真の意味に於て人間性の作家の一典型と云える所以はここにある。

上に引用した鶯が出て来る春の情景はそのまま一幅の絵になるものである。

《**Flamenca**》は中世が産み出した作品の中で最も豊かな、恐らくは最も浩瀚な作品である。⁸⁾ 而も全篇の筋は、全芸術作品の特徴たる調和を以て展開しているのである。H. Davenson も云う通り、これは **Oc** 語の物語の中で尤も魅力あるものの一つであり、最も独創的なものである。⁹⁾ 現存の状態でもこの作者の非凡な才能と、この作品の醍醐味を十分味えるのであるが、埋滅した個所がなければ猶一層この作品はその調和と完成の美を輝かしていたらうにと惜しまれるのである。それにしても今日これ程高く評価される作品が、当時に於て

は殆ど、或は全く成功を収めなかったのは実に皮肉なことである。同じことは《Aucassin et Nicolette》や Beaunoir の《Jehan et Blonde》等についても云えるのである。先に触れた Ch.-v. Langlois の《La Vie en France au moyen âge d'après des romans mondains du temps》の中に論述されている12の物語の内、Charles 五世の書庫には《Châtelaine de Coucy》しか無かったと云うことだし、また屢々筆写されたものは《Châtelaine de Vergy》だけだったようである。

《Flamenca》物語は、中世に於ても他の時代同様、最も秀れた作品が実は最も不人気なものであったことを示す一つの典型的な例証なのである。

【注】

I. 1.

1) A. Brunel は《Flamenca》よりももっと驚異的な由来のあるものとして十三世紀の物語《Gliglois》を挙げている。この写本は1904年、Turin 図書館の火事で消失したのだが、それ以前にドイツの学者 Wendelin Foerster がこの写しを取って置いた為に忘却から救われ、彼の死後 Harvard 大学がこの写しを購入し、1932年、アメリカの学者 M. Charles Livingston により公刊されたのである (*Romans Français du Moyen Age — Essais —* [Paris, 1934] p. 262)。

2) Cf. Ch.-V. Langlois, *La Vie en France au Moyen Age de la fin du XII^e au milieu du XIV^e siècle—d'après des romans mondains du temps—* (Paris, 1924), t. 1, p. 127.

3) この初版本は京都大学も所蔵している (クラーク文庫)。

4) 今日では一般に P. Meyer 版が定本として使用されている。本稿の《Flamenca》の引用には、この Meyer 版をもとにした R. Lavaud, R. Nelli 共篇のテキストに従った：*Les Troubadours (L'œuvre épique) — texte et traduction par R. Lavaud et R. Nelli* (Bibliothèque Européenne, 1960)。

5) Flamenca とは「フランダース人」の意味である。猶、この物語の主役はむしろ Guillaume de Nevers である。

6) この時代は, Guillaume de Loris がこれより約40年前, 《*Roman de la Rose*》を創作したのを, Jean de Meun が後を受継いで彼なりに続行した時期であり, 後述するように, 《*Flamenca*》はこの影響を受けたと考えられる。詳細は前記 R. Lavaud et R. Nelli 版テキストの解説 (pp. 621-24) を参照。

7) Cf. M.L. Bartolozzi Bustini, *La Natura Umana——nel Romanzo di un Anonimo Provenzale*——(Milano, 1955)。A. Brunel は1234年を主張している (cf. *op. cit.*, p.273)。

I. 2.

1) 大意: Alga の殿なら, 出来ればそれを模倣したであろう。しかし正義が行なわれるならば, 彼はそれだけの感謝を受くべきであろう。何故なら彼は出来ることは全て喜んでするし, また屢々それ以上のこともするのだから。彼が1年に百回も, 1年の収入を全部費しかねないことを私は知っているのだ。私は彼の功績を贅えるのに口出ししたくはない。しかし Bernardet 殿に関する限りは別だ, 私は殿がこれ以上愛されないのが残念だし, それに殿はそのことを別に嘆かれてもいないのだ——。嘘ではなく, 私はこう云えるだろう, 殿を贅えたとして間違いを犯しはしない, と。

2) Bernardet を《*Flamenca*》の作者と承認している批評家に S. Debendetti や Ch. Grimm があり, 便宜上 Bernardet を作者として記述しているものには M. J. Hubert がいる。

3) vv. 349-51 (*Ars am.*) ; 703-5 (*Metam.*) ; 1819-1822 (*Remed. amoris*) ; 3045-50 (*Metam.*) ; 5569, 6254, 6275-7554 (*Ars am.*) .

4) v. 7865.

5) vv. 1656-1666 (*De beneficiis*).

6) v. 7686.

7) *Epic and Romance——Essays on Medieval Literature* (N.Y., 1957, Dover reprint), p. 361. 彼が本書の Appendix で古典世界からの影響を示す顕著な例として引用している有名な個所を序に掲げておく (*ibid*, pp.384 ff.). 猶, G. Highet がこれに示した出典も併記して置いた (*The Classical Tradition* [N. Y., 1964], pp. 580-81)。

v. 617—Qui Volc ausir diverses comtes

De reis, de marques e de comtes

Auzir ne poc tan can si volc ;	
Anc null'aurella non lai colc,	
Quar l'us comtet de Piramus,	The tale of Troy.
E l'autre diz de Piramus ;	Ovid's <i>Metam.</i> , 4.
L'us comtet de la bell'Elena	The tale of Troy, and Ov. <i>Heroides</i> , 17.
Com Paris l'enquer, pois la'n mena ;	"
L'autres comtava d'Ulixes,	The tale of Troy.
L'autre d'Ector e d'Achilles ;	"
L'autre comtava d'Eneas	The tale of Aeneas.
E de Dido consi remas	"
Per lui dolenta e mesquina ;	"
L'autre comtava de Lavina	"
Con fes lo breu el cairel traire	"
A la gaita de l'auzor caire ;	"
L'us comtet de Pollonices,	The tale of Thebes.
De Tideu e d'Etiocles ;	(Polynices, Tydeus, Eteocles.)
L'autres comtava d'Apolloine	Apollonius of Tyre(a late Greek romance).
Consi retenc Tyr e Sidoine ;	"
L'us comtet de rei Alexandri,	The tale of Alexander.
L'autre d'Ero e de Leandri ;	Ovid's <i>Heroides</i> ,18.
L'us diz de Catmus can fugi	The tale of Thebes, and Ov. <i>Metam.</i> , 3.
E de Tebas con las basti,	"
L'autre comtava de Jason	Ovid's <i>Metam.</i> , 7.
E del dragon que non hac son ;	"
L'us comte(t) d'Alcide sa forsa,	Ovid's <i>Metam.</i> , 9.
L'autre com tornet en se forsa	
Phillis per amor Demophon ;	Ovid's <i>Heroides</i> , 2.
L'un dis com neguet en la fon	
Lo belz Narcis quan s'i miret;	Ovid's <i>Metam.</i> , 3.

- L'us diz de Pluto con emblet Ovid's *Metam.*,10.
 v. 649—Sa bella mollier ad Orpheu ;
 v. 702—L'us diz lo vers de Marcabru, (A troubadour)
 L'autre comtet con Dedalus Ovid's *Metam.*, 8.
 Saup ben volar, e d'Icarus "
 Co[n] neguet per sa leujaríá. "

v. 706—Casus dis lo mieil[z] que sabía.

- 8) v. 1709
 9) v. 703.
 10) vv. 1905 ff.
 11) vv. 3687-90.
 12) v. 4477.
 13) v. 622.
 14) v. 647.
 15) vv. 665-67.
 16) vv. 671-72.
 17) v. 673.
 18) vv. 677-79.
 19) vv. 684-87.
 20) 大意：彼の胸裡には、彼女に話すことが出来れば彼女を愛するだろうという考えが生ずる。このことを考えていると、愛の神が愛敬よく陽気な風采をして彼の傍にやって来る。愛の神は勇敢で幸福な冒険を与えることを彼に約束する。そして彼に訓戒を与え、長い間説教し、彼が誰よりも器用で奸智にたけていることを示してやる。
 21) 大意：それは耳が感ずることも出来ず、舌が述べることも出来ぬような多くのものの観念を形作る悟性が、そのことを殆どよく理解してはいないのだ。私はこのことに関して、眼によって人の心を捉える優しさの方が、口先から出された優しさよりも価値があるということを云いもし、示したりもしたいのだ。
 22) M. L. Bartolozzi Bustini, *La Natura Umana nel Romanzo di un Anonimo Provenzale* (Milano,1955), p. 15.

23) 大意：何故なら、私は教育のない人間がパンにも塩にも価値のないことを知っているからだ。如何に金持でも、彼が殆ど常識がなければ、その価値の多くを失うのだ。そしてうわつらの教養を少し持っている婦人でも十分な資格を持っている[ことになる]。

24) Cf. vv. 2277 ff. 2555行には聖務日課書のことも見えている。

25) Ch.-V. Langlois, *op. cit.*, pp.130-31.

26) M. L. Bartolozzi Bustini, *op. cit.*, p. 16. このような所説は既に S. Debendetti によって主張されたものであるが、今日でも多くの学究により承認されている。

27) vv. 3229 ff.

28) Q. v. E. Lavissee, *Histoire de France* (Paris, 1911), Vol. III, p. 403.

29) Cf. Bustini, *op. cit.*, pp.16-18).

30) Bustini, p. 19.

II. 1.

1) H. J. Weigand は《*Flamenca*》の構成を次のように六つに分類している。

- ① Introduction: The match, followed by two brilliant feasts
- ② Jealousy Rampant: The marriage on the rocks
- ③ Operation Rescue
- ④ Operation Pleasure
- ⑤ Operation Cure
- ⑥ Postlude: Polishing the "hornworks"

(*Surveys and Soundings in European Literature* [Princeton, 1966], pp. 27-50)

- 2) 試合に臨む時、騎士が貴婦人から貰うリボンのこと。
- 3) 現代フランス語の“Hélas”に相当する。
- 4) Bourbon の温泉場は中世に於ては非常に有名であった。この物語に於ても、フランス、ブルゴーニュ、フランドル、シャンパーニュ、ノルマンディー、ブルターニュから湯治にやって来た外国人が多かったことが知られる (cf. vv. 3796-3800)。

II. 2.

- 1) Amors はプロヴァンス 語では女性のため、女性化されている。
- 2) 大意：しかし私にこの習慣を与えたのは愛だ。屢々私が睡眠中に、思いのまま私の

腕に私の婦人を抱かせるのは。

3) Cf. vv. 2808-2956.

4) R. Lavaud et R. Nelli, *Troubadours*, t. I, p.629.

5) Cf. M. J. Hubert and M. E. Porter, *The Romance of Flamenca* (New Jersey, 1962), p.23.

6) 大意：他人の苦悩を悩むようにさせるこの甘美を人間に生じさせるのは愛によってである。以前私はこれ程の憐憫を感じたことはなかったし、他人の苦悩をこれ程悩んだことはなかった。これを私に惹き起こしたのは愛(Amors)だ。私は私の婦人がいとしい。だから彼女がその苦痛を忍ぶよりも、私が(その苦しみを)悩みたいと欲して何が悪かろう。

7) Hubert and Porter, *op. cit.*, p.24. Francesco da Barberino も端的にこの考えを示す詩を伝えている (q.v. 拙稿「トゥルバドゥールと中世イタリア文学」〔桃山学院大学『人文科学研究』第4巻第1号所載〕 pp.49-50)。

8) R. Nelli, *L'Erotique des Troubadours* (Paris, 1963), p. 173.

9) Lavaud et Nelli, *ed. cit.*, p. 632.

II. 3.

1) 大意：そして彼等は鶯が快い時と緑を楽しんでいる、町外れのある庭にやって来る。Guillaume は熟した美しいリンゴの木の下で涼をとる。主人は彼の顔色が青白いのを見て先日彼に話してやったあの病気が、彼の顔色をこんなに奪い去ったのだと考える。主人は彼の健康を取戻してくれるよう、そして彼が欲している総てのことを成就してやる許しを熱心に神に祈る。しかしながら、Guillaume は鶯に耳を傾けていて、彼の主人の祈りを聴こうとしない。まことに、愛は人を盲目にし、人から聴覚を取り上げ、自分の感覚を最も自惚れる時、彼を狂人と化してしまうものだ。

Guillaume は何も聴かぬ。何も見ぬ。何も感じぬ。彼は眼も、手も、口も動かさぬ。彼は鶯の歌がもたらした悩みで心を傷つけられたのだ。

2) 大意：Guillaume は夜になる迄、そんな風にして彼の室内で休んでいた。それからいつもの習慣で、木立の中の鶯を聴きに出た。しかし彼の病気は鎮まる所か、一層進行させ、悪化させるばかりだった。

3) Bustini, *La Natura Umana*, p.92.

4) Lavaud et Nelli, *ed. cit.*, p.634.

- 5) W. P. Ker, *Epic and Romance*, p.361.
- 6) 十二・三世紀には僧侶や騎士の恋人としての優劣について多くの議論がなされていた。q. v. E. Faral, *Recherches sur les sources latines des contes et romans courtois* (Paris, 1913), pp. 191 ff.
- 7) Cf. Bustini, *op. cit.*, pp. 37, 92.
- 8) Lavaud et Nelli, p.634.
- 9) H. Davenson, *Les Troubadours* (Paris, 1961), p. 43. 彼は同所に於て, Alexandre Blok の劇, 《*La Rose et la Croix*》の骨組は《*Flamenca*》から借用したものであろうと付加えている。

【後記】この拙稿は昭和42年2月桃山学院大学人文科学研究例会で発表した草稿を増補したものである。